

ポスターセッション

地域連携デジタル・ネットワーキングに関する研究 —「灰干しがつなぐ地域再生ネットワーク」を事例として—

大妻女子大学 千川剛史

1 目的

この報告の目的は、宮城県気仙沼市・南三陸町、鹿児島県屋久島町・口永良部島、宮崎県都城市・高原町、熊本県南阿蘇村の間で展開されている「灰干しがつなぐ地域再生ネットワーク」を事例として、参与観察（ワークショップの開催及び宣伝販売 等）や聞き取り調査による現地調査及び文献・資料の分析・考察を通じて、「地域連携デジタル・ネットワーキング」（災害被災地や条件利地域が相互にデジタル・メディアを活用して連携し展開する地域再生の取り組み）の実態と課題を明らかにすることである。

2 方法

そこで、まず、1. 東日本大震災被災地の南三陸町「福興市」での「桜島灰干し」と「熟成たかはる灰干し」の宣伝販売による参与観察の結果から灰干しのブランド化の課題を考察する。次に、2. 参与観察に基づいて「気仙沼灰干しの会」による「気仙沼フカの灰干し」（仮称）の商品化・事業化の現状と課題を明らかにする。他方で、3. 「平成 28 年 熊本地震」を契機に被災地の南阿蘇村において始まった復興支援としての灰干しづくりの可能性を参与観察に基づいて明らかにする。そして、4. 東日本大震災被災地と連携しながら火山災害被災地で展開する「灰干しがつなぐ地域再生ネットワーク」の実態をとらえ、5. このネットワークの関係構造を「デジタル・ネットワーキング・モデル(DNM)」によって描き出した上で、今後の研究課題を提示する。

3 結果

以上のように、報告者が実施した「灰干しがつなぐ地域再生ネットワーク」に関する調査研究から得られた知見を「デジタル・ネットワーキング・モデル(DNM)」を用いて描き出すことができた。また、平成 28 年度の研究成果としては、南三陸町福興市と灰干しワークショップで「気仙沼灰干しの会」が試作したサメ肉の灰干し等を多数の協力者に試食してもらい、専門家の助言の下に品質改良を行うことで「気仙沼フカの灰干し」（仮称）として商品化できる可能性が明らかになった。また、灰干しの商品化・事業化を通じた産業創出による地域再生に関する意見交換の場である「灰干しフォーラム」を設立できた。

4 結論

以上から、参与観察を中心とする調査研究を通じて、三宅島火山災害から霧島連山新燃岳火山災害、東日本大震災、口永良部島火山災害を経て熊本地震に至る「灰干しがつなぐ地域再生ネットワーク」の展開過程の実態と課題を明らかにすることができた。こうした調査研究の成果に基づいて、今後の研究において、「地域連携デジタル・ネットワーキング」の実態と課題を明らかにし、さらに、被災地復興を含めた地域再生のための汎用性に富んだ効果的な方策を提案することに取り組んでいく。

文献

千川剛史, 2017, 「地域連携デジタル・ネットワーキングに関する研究—平成 28 年度の「灰干しがつなぐ地域再生ネットワーク」の展開—」（報告）, 「人間生活研究」No.27(2017), 大妻女子大学人間生活文化研究所, (掲載決定)